



⑧ 中国の言語空間

激化する対米批判

私の本業は中国の対外政策の研究だが、尖閣諸島問題で反日デモが起きてからは、中国での調査がとてまやりにくくなった。仕方なく7年ほど、主に中国の周辺国に出かけ、中国が何をしているのか聞いて回るといふ作業をしていた。ようやくこの3カ月、中国社会科学院に籍を置きながら、中国の専門家たちをゆっくり訪問する機会に恵まれた。日中関係改善のおかげだが、裏を返せばそれだけ、中国は国外の味方を欲するようになっている。

今回の滞在中、米中貿易戦争がどんどん激しさを増していった。中国の「専門家」たちは、以前から日米貿易摩擦の事例を研究しており、心の準備はできていたはずだ。中国と太いパイプを持つ福田康夫元首相は、外圧を国内改革に活かした当時の経験を中国の人々によく語っている。中国でも4月ごろまでは「災を転じて福となそう」という機運があった。ただ、トランプが対中関税の25%への引き上げを発表し、さらにファーウェイに対して事実上の禁輸措置が取られると、メディアの対米批判のレベルが上がり、国内の雰囲気は一気に敵対的になってきた。

感情的「戦略家」

経験的には、中国の国際問題の研究者の中で、自称「戦略家」ほど面倒な人たちはいないと思う。一昔前まで海洋問題でしきりに日本

叩きをしていた彼らの間では、昨今、反米感情が急激に高まっているようだ。

ある大学教員は、「血飲」という名前もいかにもなWeChatサイトを

私に送ってきて、「これが現在の中国の主流の考え方だ」と述べる（私の中国の職場ではまず主流ではないが）。そのサイトをざっと見ると、中国人は40年間、自力で経済を発展させ技術を磨いてきた優秀な民族で、東南アジアや南アジアの劣った人間たちはこの生産力を代替できない、中国の協力が得られなければアメリカの行く末も終わりだ、といったような主張が隠語混じりで書いている。日本ならほぼ右翼と呼べる。

だが、彼はこのサイトにかなり入れ込んでいるようで、私がアメリカ批判に同調しないと、「お前はまだ目覚めないようだな」とお叱りを受けた。別の専門家も、私に対して、「アジアのすべての問題はアメリカが長期覇権を握り続けるために仕掛けた陰謀なのだ。なぜ気づかないのだ」と怒っていた。

中国には、これらの「戦略家」とは対極の考え方をとる研究者もいる。ある高名な学者は、中国がWTO加盟時に約束した「市場経済国」としての行動を取らなかったことに諸悪の根源

がある、中国は国家資本主義をやめて民間企業の活動を促進すべきだ、と語っていた。ただ、彼の活動は近年、当局からかなり厳しい統制を受けている。国内の閉鎖的言語空間のバランスは、自称「戦略家」の方に大きく傾きがちだ。

人類の岐路？

問題は、対外関係の緊張を高めれば高めるほど、権威主義体制内ではそれが国内政治とリンクしてしまうことだ。国内でナショナリスティックな反米感情が強まると、政権はそれを無視しにくくなる。しかし妥協しなければ、アメリカからの圧力がさらに強まり、対外関係は硬直する。国内メディアに敵対的な論調を許し、人々の関心をそこに向けたことで、政権は自らを対外関係と国内政治の間（はざま）に位置付けてしまった。かつて対日関係で見た、政権板挟みの構図に似てきた。

米中貿易戦争が長期化すれば、政権としては国内政治の安定性を優先せざるを得ないだろう。しかし、アメリカと敵対し、袂（たもと）を分かてば、それをきっかけに世界が二極化する可能性がある。日本や西欧といった経済力・技術力のある国は、どちらかを選べと迫られれば、アメリカを選ばざるを得ない。中国側につくのは、中国の「一帯一路」での大盤振る舞いに期待する、自助努力に乏しい発展途上国だけだろう。世界の二極化は、中国に圧倒的に不利である。

歴史を振り返って明らかなのは、人間は最も合理的な解を選ばないことがある、ということ。中国の指導者にはぜひ、今を人類の岐路にしてしまわないような道を選択してほしい。

（益尾知佐子・九州大学比較社会文化研究院准教授）

国内から見た米中貿易論争